

アジアの頂点へ走り抜ける



2年ぶりの日本選手権優勝に向けて室内で体を動かす林愛望
＝愛知県美浜町の日本福祉大で

2年後の愛知・名古屋アジア大会で、地元での金メダルを見据える有望株がいる。林愛望(まなみ)は日福大・まるいち、愛知県西尾市出身。今季、アジアカップで4度優勝。17日の日本選手権(東京・お台場海浜公園周辺)では、史上最年少の17歳で優勝した。2022年以降の頂点を狙う。5日に20歳となった実力者は「今は調子が悪いときがあまりない」と充実ぶりを語る。

(山内晴信)

トライアスロン

今夏のパリ五輪はあえて目標さなかつた。「出場するなら、2、3年前から海外を転戦してポイントを稼ぐために、学校に

行けなくなる。高校生活を満喫したかった」。だから次の4年間は国際舞台に打って出る。「26年に愛知であるアジア大会で優勝することが一番の目標。28年のロサンゼルス五輪にも出

日福大・林 26年大会の先 五輪見据える

「それなら」と地元での栄冠と、その先の躍進を思い描く。原点は保育園のころ。仲の良かった一つ年上の女の子が、小学校の校内マラソン大会で1位になったと聞いた。負けず嫌いな性分。「自分も1番をとりたい」と、誰に言われるでもなく走るようになった。毎朝のランニングを欠かすことなく、大会では6年連続で学年トップ。並行して取り組む競泳でも力を伸ばし、高学年になって今も師事する倉内千紘コーチに誘われた。「トライアスロンっていう競技があるんだけど」

自信を取り戻させたのは、日々の地道な取り組み。今でも毎朝のランニングやバイクを怠らず、午後は大学の水泳部、陸上部で体を動かす。週末には実家に戻って倉内コーチの指導を受け、課題と向き合う。着実に力を伸ばし、8月の世界大学選手権では銅メダル。アジア勢との争いや日本人同士の対決では安定して好成績を残している。

昨年の日本選手権では、国内では珍しく敗北を喫した。パリ五輪代表の

に大きく離されての2位に「スタート付近で一緒にレースができなかった」と悔しがる。20代になって初めての同選手権は、雪辱のチャンスでもある。「今年は少しでも長く一緒にレースをして、対等に戦えたら」。日本勢では唯一と言える壁に挑み、世界へ向けて新たな一步を踏み出す。